

神を信頼する

1.はじめに

10:11 聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

皆さん、おはようございます。今日は、神を信頼するというテーマで皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

神を信頼する、というテーマの場合、神を信頼しましょう！という励ましや、神を信頼することの重要性について学ぶことが多いように思いますが、今日は、ダビデの生涯を通して、神に対するダビデの信頼について学びたいと思います。

さて、皆さんにとって、もっとも「信頼できる人」を思い浮かべてください。皆さんがその人を信頼できる理由は何でしょうか？理由もなく人を信頼することはありません。信頼するにはそれだけの理由があるからです。その理由が合理的であろうとなかろうと、理由なく人を信頼することはできません。

同じように、神を信頼することについて、皆さんはどのような理由、あるいは動機や経験をお持ちでしょうか。今日お話しさせていただくダビデがなぜ、あるいはどのような動機や経験、背景によって神を信頼していたのかについて考えていただきながらお話を聞いていただければと思います。

2.ダビデの告白

では、旧約聖書を代表する人物の1人である、ダビデについて考えてみたいと思います。ダビデは旧約聖書の歴史書であるサムエル記第1 16:13で登場してから、列王記第1 2:12、そして歴代誌第1 29:29に至るまで、歴史書の4書にその人生と業績について教えられています。それだけでなく、詩篇の中にもダビデが書いた歌が数多くあります。全部で150篇ある詩篇の内、ダビデによる、と書かれているのが73篇、また前後のつながりからダビデが書いたかもしれないものもありますが、詩篇の約半数はダビデによる歌です。イスラエル王国を確立させただけでなく、信仰面においてもダビデは旧約聖書のシンボリックな存在であることがわかります。

そのダビデが書いた歌の内、詩篇 143:8で、ダビデはこのように告白しています。

143:8 朝にあなたの恵みを聞かせてください。**私はあなたに信頼していますから**。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

143:9 主よ。私を敵から救い出してください。私はあなたの中に、身を隠します。

143:10 あなたのみこころを行うことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。

非常に味わい深い3節です。彼は「私はあなたに信頼している」と告白しました。これは、神に対するダビデの信頼が完全なもの、欠けたところが何一つないものであったということではなく、そのような不完全な存在であり、信頼しかできないダビデを、神は完全に受け入れてくださっているという信仰に基づく告白です。そのことを教えているのが、詩篇 103篇です。103:1-12を開きましょう。

103:1 わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。
103:2 **わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くてくださったことを何一つ忘れるな。**
103:3 主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、
103:4 あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、
103:5 あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、鷲のように、新しくなる。
103:6 主はすべてしいたげられている人々のために、正義とさばきを行われる。
103:7 主は、ご自身の道をモーセに、そのみわざをイスラエルの子らに知らされた。
103:8 主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。
103:9 主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。
103:10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。
103:11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。
103:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。
103:13 父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。
103:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

先ほどご紹介したダビデの人生、業績について教えられている歴史書 4 書を振り返りながら、この詩編 103 篇を読むと、人間の不完全さとそれを赦し、受け入れ、恵みを与えられる神の愛といつくしみの深さに感動させられます。

ダビデについては、皆さんもよくご存じかもしれませんが、この詩編 103 篇をより深く学ぶために、彼の人生におけるいくつかの重要なトピックを振り返ってみたいと思います。

3.ダビデの召命

イスラエルが自分たちを統治するための王を求めたときに、神はサウルを初代の王として立てられましたが、サウルは神が命じられたことに対して大きな過ちを犯し、その結果神はサウルを王として立てられたことを悔やまれることとなります。(参照: 1サム 13:8-15、1サム 15 章)

その後、神は預言者サムエルを通して新たな王を立てられます。サムエルは神の言葉に従い、ベツレヘム人エッサイに会いに行きます。神が、このエッサイの息子たちの中に、王を見つけた(1サム 16:1)と示されたからです。このエッサイには 8 人の息子がいました。その中のエリアブを見たときに、サムエルはその容姿を見て「確かに、主の前で油を注がれる者だ。」と思いましたが(1サム 16:6)、神は重要なことを教えられます。サムエル記第 1 16:7 を開きましょう。

16:7 しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

エリアブや他の息子たちの心が悪かったということかどうかも聖書は明確に教えていませんが、少なくとも神がサウルに代わる王を選ばれる基準は、外見的な要素ではなく、心でした。ですから、神がダビデを選ばれた理

由はただ一つです。神はダビデの心を見られ、ダビデの心が、サウルに代わりイスラエルを治める王としてふさわしかった。これが、選ばれた理由です。

しかし、彼自身が王として召命を受けることは、あまりにも唐突でした。彼は望んで王になったわけでもなく、段階を踏んで権力のトップへ登ろうとしていたわけでもありませんでした。彼はエッサイの子供、末息子として羊を飼い、家族に仕えていた少年に過ぎませんでした。事実、エッサイはサムエルに言われて、自分自身と子供たちを聖別し、いけにえをささげようとしたときに、エッサイはダビデを羊の番をさせるために野に置いておきました。偉大な預言者サムエルに自分の息子たちを引き合わせるということでは、もっとも優先順位が低かったということでしょう。ダビデが選ばれ、選びのしるしとして油が注がれた時の、ダビデや父エッサイの気持ち、感情、様子については何も教えられていませんが、「主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った」(1サム 16:13)のですから、これは彼が選ばれたことについて、ダビデ、父エッサイだけでなく、ベツレヘムに住む人たちにとっての大きな印になったと思います。それでも、ダビデのこれからの人生がどうなるのか、誰にもわからなかったと思います。

では、このような突然の召命を受けたダビデが、王になるまでに経験したこと、そして王になってから経験したことをそれぞれ一つだけ一緒に考えてみたいと思います。

4. サウル王から命を狙われる

ダビデはこの後、サウル王が悪い霊におびえさせられるときに、王が元気を回復するためにたて琴を奏でるという大役を任せられ、王に仕えることとなります。それから、ダビデはたて琴を奏でるだけでなく、戦いの場面においてもたくさんの功績を残します。

しかし、サウル王とダビデが戦いから帰ってきたときに、王は、喜びながら彼らを迎えた女性たちが、笑いながら

「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。」(1サム 18:7)

と歌っているのを見て非常に怒ります。実際、ダビデのおかげでイスラエルは戦いに勝利していたようですから、ねたみや嫉妬でしかありませんが、この日以来、サウル王はダビデを疑いの目で見ようになり、ダビデを殺そうと始めます。初めは、自分の槍を投げつけるようなやり方ですが、それがどんどんエスカレートし、サムエル記第1 24:1-2では

24:1 サウルがペリシテ人討伐から帰って来たとき、ダビデが今、エン・ゲディの荒野にいるということが知らされた。

24:2 そこでサウルは、イスラエル全体から三千人の精鋭をえり抜いて、エエリムの岩の東に、ダビデとその部下を捜しに出かけた。

このように教えられています。

イスラエル全体から三千人の精鋭をえり抜いた。これは、一人のしもべを捜査するような人数ではなく、もはや戦争です。それほど、サウル王はダビデを憎んでいたということです。しかし、ダビデは何をしたのか。彼はサウル

王のために、またイスラエルのために戦い、勝利を収めた。サウル王の不利益となるようなことは何一つしなかった。このことは、ダビデがサウル王から命を狙われる前、後、一貫したダビデの姿勢です。サムエル記第1 24:3-6にはこのように教えられています。

24:3 彼が、道ばたの羊の群れの囲い場に来たとき、そこにほら穴があったので、サウルは用をたすためにその中に入った。そのとき、ダビデとその部下は、そのほら穴の奥のほうにすわっていた。

24:4 ダビデの部下はダビデに言った。「今こそ、主があなたに、『見よ。わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。彼をあなたのよいと思うようにせよ』と言われた、その時です。」そこでダビデは立ち上がり、サウルの上着のすそを、こっそり切り取った。

24:5 こうして後、ダビデは、サウルの上着のすそを切り取ったことについて心を痛めた。

24:6 彼は部下に言った。「私が、主に逆らって、主に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。彼は主に油そそがれた方だから。」

ここで一気にサウル王を殺してしまえば、ダビデも、ダビデの部下にとっても平和になるのですが、ダビデは「私が、主に逆らって、主に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にできないことだ。彼は主に油そそがれた方だから。」と言い、部下を諭します。

王から命を狙われても、主が油そそがれた王に手を下すことなど、主の前に絶対にできない。ここに、神に対するダビデの信頼を見ることができます。

このように、神を信頼し、神に忠実であったダビデですが、サウル王に代わり自分自身が王になった後、大きな失敗をしてしまいます。サムエル記第2 11:1-5を開きましょう。

5.部下の妻との失敗

11:1 年が改まり、王たちが出陣するころ、ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエルの全軍とを戦いに出した。彼らはアモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまっていた。

11:2 ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。

11:3 ダビデは人をやって、その女について調べたところ、「あれはヘテ人ウリヤの妻で、エリアムの娘パテ・シェバではありませんか」との報告を受けた。

11:4 ダビデは使いの者をやって、その女を召し入れた。女が彼のところに来たので、彼はその女と寝た。——その女は月のものの汚れをきよめていた——それから女は自分の家へ帰った。

11:5 女はみごもったので、ダビデに人をやって、告げて言った。「私はみごもりました。」

ダビデの失敗としては、最も有名な記事だと思います。サムエル記第2に教えられている以上のことをお話する必要はないほどの記事です。しかも、それだけではなく、この後ダビデは、このパテ・シェバの夫であるウリヤを激戦地に送り出し、無理やり戦死させます。サムエル記第2 11:15-17にはこのように教えられています。

11:15 その手紙にはこう書かれてあった。「ウリヤを激戦の真っ正面に出し、彼を残してあなたがたは退き、彼が

打たれて死ぬようにせよ。」

11:16 ヨアブは町を見張っていたので、その町の力ある者たちがいると知っていた場所に、ウリヤを配置した。

11:17 その町の者が出て来てヨアブと戦ったとき、民のうちダビデの家来たちが倒れ、ヘテ人ウリヤも戦死した。

まさに、権力者でなければ犯せない罪です。しかも、自分では直接手を下さない、大変狡猾なやり方です。サウル王に命を狙われていた時、この王の命がまさに自分自身の手の中にあるときでさえ、神への信頼と忠誠を裏切らず、王に手をかけなかったダビデが、自分自身の権力を使い、2つの大きな罪を一度に犯してしまいました。

神は、この後預言者ナタンを通して激しく叱責されます。ナタンに叱責された後のダビデの告白が、詩篇 51 篇に教えられています。詩編 51:4、6、10-13、16-17 をお読みします。

指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき

51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

51:6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。

51:10 神よ、私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。

51:11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。

51:12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。

51:13 私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。

51:16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。

51:17 神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ、あなたは、それをさげすまれません。

4 節で、ダビデが自分自身の罪を認めていることがわかります。その上で、彼はその行為だけでなく、心が重要であることを4回告白しています。心のうちの真実、心の奥の知恵、きよい心、砕かれた、悔いた心。ダビデは、見た目の容姿や腕力、知力で選ばれたのではなく、その心を見て選ばれた、と聖書は教えています。神がサムエルに「主は心を見る」と教えられたのです。そのダビデが、バテ・シェバ、ウリヤに対して罪を犯したとき、その心は主がダビデを選ばれた時のような状態ではなく、心には真実がなく、知恵もなく、汚れ、高慢であったことを知りました。このようにして、神は、この大きな罪を通して、ダビデが失った心、本来彼が持つべき心について示されました。

これらのダビデの経験以外にも、彼は王になるまで、そして王になってからも、称賛されるようなことから神に叱責されるようなことまで、たくさんの経験をするようになります。彼の人生は決して平坦な道ではありませんでした。

このようなダビデの人生を考えると、彼が歌った詩篇 103 篇は、まさにダビデの人生そのものであることがわかります。もう一度、103:8-14 をお読みしたいと思います。

103:8 主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。

103:9 主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。

103:10 私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。

103:11 天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。

103:12 東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

103:13 父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。

103:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

14 節で、「主が、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。」と告白し、教えています。彼がイスラエルの王の家来として、また自分自身がイスラエルの王となって学んだことの一つは、神は私たちのことを全部知っておられる、ということです。神が私たちのことを全部知っておられ、その上で 11 節、13 節に教えているように「御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。」「主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。」ことを告白しています。

ダビデは神をこのように理解していました。それは、字面での理解や人から聞いたこととしての理解ではなく、彼の人生を通して、また良かったときと苦しかったときの両方を通して、自分自身の体験としての理解です。彼の人生は、100%神を恐れる人生、間違いのない人生ではありませんでしたが、それでも神を恐れようとするダビデに対して、神は恵まれ、あわれたということを経験を通して学んでいました。だからこそ、詩篇 143 篇に教えられているように、ダビデは神を信頼することができたのです。

143:8 朝にあなたの恵みを聞かせてください。私はあなたに信頼していますから。私に行くべき道を知らせてください。私のたましいはあなたを仰いでいますから。

143:9 主よ。私を敵から救い出してください。私はあなたの中に、身を隠します。

143:10 あなたのみこころを行うことを教えてください。あなたこそ私の神でありますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。

ダビデの人生をゆっくり学ぶと、彼の成功や失敗を通して、神からの召命を受けた王でありながらも、彼の人間臭い面と、その中でもがきながらもなんとか神にしがみつき、神とともに歩もうとする姿勢がわかります。その中で、ダビデが神を裏切ってしまうことはあっても、神はダビデを裏切ることがなかった。たった一度もなかった。そればかりか、ダビデの失敗に対していつも寛容であった。これが、神に対するダビデの信頼の根拠であったと思います。

では、具体的に神を信頼することとはどういうことなのか。

6. 神を信頼する

ペテロの手紙第 1 2:1-6 を開きましょう。

2:1 ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、

2:2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。

2:3 あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。

2:4 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。

2:5 あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。

2:6 なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」

ご存知の通り、ペテロはイエスの弟子の中では最も有名な弟子の 1 人であり、福音書だけでなく、使徒の働きに登場し、ペテロの手紙第 1、第 2 を執筆したことを考えると、シンボリックな弟子であったと思います。ただし、同じように新約聖書でのシンボリックな存在であるパウロと比較すると、失敗が多く少し調子に乗りやすい印象があります。このペテロの失敗を考えると、まず思い浮かぶのがルカの福音書 22:54-62 での出来事です。その前提となるルカの福音書 22:33-34 とあわせて開きたいと思います。

22:33 シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」

22:34 しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

22:54 彼らはイエスを捕らえ、引いて行って、大祭司の家に連れて来た。ペテロは、遠く離れてついて行った。

22:55 彼らは中庭の真ん中に火をたいて、みなすわり込んだので、ペテロも中に混じって腰をおろした。

22:56 すると、女中が、火あかりの中にペテロのすわっているのを見つけ、まじまじと見て言った。「この人も、イエスといっしょにいました。」

22:57 とところが、ペテロはそれを打ち消して、「いいえ、私はあの人を知りません」と言った。

22:58 しばらくして、ほかの男が彼を見て、「あなたも、彼らの仲間だ」と言った。しかしペテロは、「いや、違います」と言った。

22:59 それから一時間ほどたつと、また別の男が、「確かにこの人も彼といっしょだった。この人もガリラヤ人だから」と言い張った。

22:60 しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません」と言った。それといっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。

22:61 主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う」と言われた主のおことばを思い出した。

22:62 彼は、外に出て、激しく泣いた。

イエスの言葉通りに、ペテロはイエスのことを 3 度知らないと言いました。その直後に鶏が鳴き、イエスの言葉を思い出したペテロは外に出て激しく泣いた、と教えられています。泣いたということは、自分自身の失敗を悔やんだということですが、数々の失敗を繰り返したペテロが、その失敗を悔やんで泣いたと教えられているのはこの箇所だけですから、本当にイエスを愛し信頼していたのだと思います。

このような大きな失敗をしたペテロが、AD60 年頃、まさに神とイエスを信仰する人々に対する迫害が厳しくなっている状況下で、クリスチャンに対してこのように教えています。もう一度、ペテロの手紙第 1 2:6 を開きましょう。

2:6 なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する

者は、決して失望させられることがない。」

いかがでしょうか。神に信頼する者は、決して失望させられることがない。聖書はこのように教えます。そうは言っても、いつも希望をもって前に向かっていけるか。そうありたい、そのようにしたいと思うが、ちょっとしたことで私たちの心を曇らせ、また雨を降らせることがあります。そして、同じようにちょっとしたことで私たちの心が晴れやかになることもあります。このように、人生において右往左往しながら生きているのが現実ではないかと思えます。もし私たちが失望することがあるなら、それは私たちの信頼が足りないのでしょうか。この問いに答えるなら、それは yes、ということでしょう。では、信頼が足りない私たちは、100%の信頼、完全な信頼を持つべきでしょうか。この問いに対して答えるなら、やはり yes、ということでしょう。では、100%の信頼、完全な信頼を持つことは可能なのか。問題はこの 1 点かもしれません。人間の弱さは、残念ながら神に対する 100%の信頼をいつも妨げようとします。ペテロも、自分自身は投獄されようが、殺されようが、イエスについていく、そのような覚悟をしていると言ったにもかかわらず、自分自身の身が危くなると簡単にその覚悟が緩んでしまったのです。そして、自分自身の失敗を悔やみ、外に出て激しく泣く。この経験は他人ごとではないと思えます。神を信頼し、忠実に生きようとすればする程、私たちの弱さはそれを妨げようとするのです。

ダビデ、ペテロ。生きた時代は違いますが、同じ神を見上げて、同じ神を信頼して生きようとした人物です。それぞれの時代において、シンボリックな存在であり、多くのことを学ぶべき信仰の先達です。しかし、彼らは完璧ではなかった。完全な存在ではなかった。それでも、彼らは神を信頼することを証しし、教え、励まし、勧めました。

もう一度、詩篇 103:14 を開きましょう。

103:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

このような私たちに対して、聖書は「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」と教えるのです。神を信頼しましょう。失敗することがあっても、大丈夫です。神は全部ご存知です。

祈りましょう。